

災害体験とチャイニーズネス ——1920 年華北大飢饉を事例に——

Experience of Disaster and Chineseness:
The Case of North China Famine in 1920

災害体験と它的中国的特性 (chineseness)
——以 1920 年华北大饥荒为事例——

穂山 新

【内容摘要】

本文の目的は、以据说灾民 2000 万人的 1920 年华北大饥荒为事例、从历史社会学的视角、显示在对于这灾害被谈了话语中的意思和解释是什么样的。

在好像每年蒙受灾荒的清末民国时期、没有华北大饥荒那么积极吸引人们的广泛关注。其因素有两个；一是在新的大众媒体的报纸急速发展的背景下、这灾害成为报纸的积极报道的对象；二是、学生作为新兴知识阶层、通过前年五四运动的经验他们的自负和自豪高涨了、还有他们还担任直接去灾区做调查而报道在报纸上。

本文发现、在这些报道中表现了“民族主义”和“灾害乌托邦”的话语。至于学生们、由于他们在这次灾害体验中受到了一些挫折和困难、所以他们的“五四”的自我认同也越来越动摇了。最后本文指出、在这次灾害体验中凸显的各种问题被知识分子认为作为所谓中国的特殊性 (chineseness) 的问题。

【关键词】灾害体验 灾害乌托邦 chineseness

1 はじめに——災害体験の歴史社会学

本稿は、1920 年に直隸省や河北省などを中心とする華北地方で発生した干ばつによる、被災者 2000 万人、犠牲者 50 万人と言われる「華北大飢饉」を事例として、この災害体験が当時の中国において、いかなる意味や解釈において受け止められていたのかを、歴史社会学的に明らかにしていくことを目標とする。

あらかじめ断っておくと、1920 年華北大飢饉は、中国の歴史において、災害の規模や犠牲者の数において未曾有のものであったわけではない。中国災害史の古典とされる鄧拓（雲特）の『中国救荒史』（初版 1937 年）によれば、中国の歴史において干ばつは 19 世紀以降から 1940 年代に至るまで 92 件と（鄧雲特 [1958]2011: 49）、3 年に 2 度弱の頻度で発生しており、それ自体はごく「ありふれた」災害であった。特に、華北大飢饉以上の甚大な被害をもたらした干ばつ・飢饉として、1876 年から 1878 年に華北地方で発生した「丁戊奇荒」と呼ばれる大飢饉（推定犠牲者 900—

1300 万人）、1928—30 年の華北・北西地域で発生した大飢饉（同 1000 万人）、1942 年の河南省を中心とした大飢饉（同 300 万人）、そして 1958 年から 61 年の「大躍進」政策に伴う大飢饉（同 1600—2700 万人）などを挙げることができる^①。さらに震災や水害そして戦災など、他の種類の災害も対象に加えるならば、華北大飢饉に匹敵する規模の災害は、同時代において決して珍しいものではなかった。

本稿で華北大飢饉を敢えて取り上げる理由は、中国の政治体制の枠組みが中華民国という「国民国家」の枠組みへと転換して以降に、最初に経験した大規模災害であったことがある。例えば、同じく華北地方が壊滅的な被害を蒙った清朝体制下における 19 世紀後半の「丁戊奇荒」では、江南地方の人士からの論評として、飢饉は天の成り行きに任せて貯蓄を怠っていた華北の人々の習性こそが原因であり、いたずらな救済はかえって江南を窮乏に導く危険性もあるという、ある種の自己責任論や地域エゴイズムが多く語られていたが（朱濤 2008）、1920 年の華北大飢饉においては、

少なくとも管見の限りそうした類の議論は全く見られなくなっている。華北大飢饉は、被災民は同胞としての「民族」「国民」として無条件に救うべき対象であり、そして国家・政府はその統治下の人々の生存を護るべき義務と責任があるという、そうした規範がはじめて明確化される契機（少なくともいくつかの重要な契機の一つ）となった災害体験であった。西欧においては、工業化と都市化に伴う新しい貧困問題を背景に、労働運動などを通じた「シティズンシップ」の拡大・深化や、そうした民衆の社会運動を国家が「国民化」していくプロセスの帰結として社会的権利が成立したと説明されてきたが（Marshall and Bottomore 1992=1993; Mann 2012: 314）、本稿では中国における災害体験の果たした歴史的な役割に着目していくものである。

以上の問題意識に基づき、本稿は華北大飢饉という災害それ自体の実態ではなく、この大規模災害をめぐる様々に語られた意味や解釈を分析の対象とする。災害の復興プロセスや防災活動などの人々の営みを対象とした社会学的な研究は既に読みきれないほどの数に上るが、災害体験がどのように当事者および第三者によって意味づけられたのか、そしてそうした意味がいかんにして人々の意識や政治・社会の変動の方向性を規定してきたのかを、歴史的に分析したものは必ずしも多くない^②。本稿は災害という事象が、それを直接体験していない第三者を含む社会全体にどのような波紋を引きこしたのかという観点から、主に当時の新聞資料を題材として華北大飢饉をめぐる言論を分析していく。その上で最後に、この災害体験を通じて知識人たちの「中国人」および中国社会の特性（チャイニーズネス）に対する問題関心が高められたことを指摘する。

2. 「赤地千里」の中国

まず 1920 年華北大飢饉の全体的な情況について、この災害についての既存研究や当時の新聞記事に従いながらその概略を述べることにする^③。

1919 年の夏から秋にかけて、華北地方の大部分で干ばつが発生した。翌 1920 年の夏から秋にかけて干ばつはさらに続き、前年の不作が連鎖的に凶作を引き起こし、多くの地域で収穫が平年の 3 割から 1 割以下という情況に陥り、直隸、河南、山東、山西、陝西にわたる広大な地域の農村が大飢饉に陥った。とりわけ被

害が深刻であったのは、直隸省（現在の天津市と河北省の一部）西部の地域であった。

華北大飢饉を伝える当時の新聞記事や調査報告は、いずれも被災地の情景を「赤地千里」（見渡す限りの干涸びた大地）と表現している。農民たちは家畜をつぶすだけは全く足らず、糠、葉、樹皮、根、雑草など、少しでも口に入る可能性のある、ありとあらゆるものを食物にした。子供は売りに出されるのでなければ、木に縛り付けられて見捨てられ、あるいは井戸に投げ捨てられた。さらに、飢饉から逃れるために、あるいは物を乞いをするために、当時建設されて間もない鉄道（特に災害地域を南北に横断する京漢線）の駅や沿線は被災民で溢れ返っていた。運よく列車に乗ることが出来た者も、地方の役人が省境を越えて下車することを許さず、途中の駅で強制的に降ろされ、そのまま放置されて死ぬ者が後を絶たなかった。さらに京漢線の沿線地域では、コレラなどの感染症といった、干ばつに伴う二次災害も引き起こされていた。北京大学の学生であった羅家倫は、京漢線で南に向かっていく時に目撃した様子を、以下のように記している。

直隸省の南から信陽県に至るまで、ずっと大地が干涸びていた（赤地千里）。災害の状況のひどさは、これまでに見たことのないほどである。莊田は失われ、うぐいす（黄鳥）もおらず、二三匹のバッタ（蚱蜢）だけが、まだ枯れ草の間を飛び跳ねている。炎天下で目にするのは群れを成す災民ばかりで、汽車が駅に到着する度に痛哭の叫び声 がして、聞くに忍びないほどであった。線路上に停まっている貨車にも、災民が群れを成して乗っている。聞くところでは、山西一帯に行くらしいのだが、最近山西からの電報で、彼らが向かうのを許さず、ゆえに途中で止まっているのだという。このような、風雨にさらされて野宿し（露宿風餐）、飢えて体が痩せ細っている（鳩形鵠面）様子は、鄭俠の「流民図」^④でも表し尽せないだろう。（羅志希「京漢道上災情目撃記」『晨报』中華民國九年九月十九日）

同じく北京大学の学生であった楊鐘健は、陝西省華県に帰省した時の見聞として、飢民は野垂れ死にするのでなければ、食料を隠し持っている家に大勢で押しかけて略奪し（「吃大戸」）、さらには本格的に「土匪」になる者もいるなど、「中国の社会は土匪の世界になっ

てしまった」と嘆いている（楊鐘健「今年暑假回家的所得（三）」『晨報』民国九年九月十九日）。

こうした深刻な災害の被害状況に対して、当時の中華民国・北京政府も10月16日以降に災害救援の専門部署である「賑務処」を設置し、各地方長官の委託を受けた救済人員が、衣食の施与、粥廠（粥の配給所）の設置、工賑（臨時の公共工事）などを実施している（楊琪 2009: 70）。しかし、これらの救済策は近代以前の「荒政」の域を超えるものではなかっただけでなく、賑務処自身の調査でも、資金調達が非常に困難であること、調達できたとしても地方官による義援に名を借りた着服や不正流用が後を絶たないこと、そして何より地方官で被災地の状況を正しく報告する者が少なく、多くが被災民の困窮に対して無為・無関心であることなどを、繰り返し報告している（李文海他 1993: 14-17）。

華北大飢饉における災害救援活動を主導した慈善組織である華洋義賑会の報告書は、被災地域の範囲は5省317県、被災者総数は1989万5114人と報告している（黃鳳華 1922）。しかし、華北大飢饉は比較的規模の大きなものではあったものの、繰り返すように、「飢饉の大地」と呼ばれた当時の中国において（Mallory 1928）、そして干ばつの常襲地域であった華北地方において、人々の想定を超えた特異な災害であったというわけでは必ずしもない。これまでと大きく異なっていたのは、この災害を眼差す社会の視線の側であった。そのことを、次節以降で検討していくことにする。

3. 新聞の中の災害体験

（1）新聞業の発展と報道合戦

華北大飢饉がこれまで中国が経験した大規模災害と異なるのは、新聞という当時新しいメディアを通じて広く盛んに報道されたことであった。特に袁世凱が死去した1916年以降、北京政府を強力に束ねる権力が不在になったことを背景に、事実上の「言論の自由」の空間が生まれ、新聞業は飛躍的な発展を見せるようになった。当時の不完全な調査による推計では、中文紙の数は辛亥革命前の1910年では100未満だったが、袁世凱政権による収縮期を経て、1919年の段階で360を超え、新聞発行部数は1912年の3700万強から1920年には8000万ほどにまで増大していた（戈公振 1927: 304-5; 小関 1985: 10-5）。

華北大飢饉に関する当時の新聞報道は、8月21日の大總統令における、山東、陝西、河南の督軍からの災害状況報告に基づいてそれぞれ二万元を配分する、という通達を伝えるものが最初である（「大總統令」『晨報』民国九年八月二十二日）^⑤。9月に入ると、『晨報』（北京）、『申報』（上海）、『大公報』（天津）、『民国日報』（上海）などの大都市の主要な新聞が、華北大飢饉に関する記事を積極的に掲載しはじめる。最も早いものとして、上海の日刊紙である『申報』は9月3日の記事で「飢えを耐え忍ぶ者すでに数万人がいま、草根、木、葉、糠を食とし、一家で食が尽きたために自殺しているものもある」という被災地の惨状を伝えている（「中国北部之大飢」『申報』中華民國九年九月三日）。北京の日刊紙である『晨報』では、9月9日に「本社の緊急通告」として、「今年の北方の凶作・飢饉は数省に広がるに止まらない。一面の干涸びた大地（赤地千里）にあつて、政府が対応している様子はなく、輿論もまだほとんど注目していない。……憂時の士がこの焦眉の問題を無視することなく、災害の状況を詳細に叙述し、多くの方法で現実的な対策を考え、人が驚くような思い切った議論を投稿することを強く願うものである」と（「本社緊要啓事二」『晨報』中華民國九年九月九日）、「輿論」の喚起を讀者＝「憂時の士」に訴えている。この9月9日から『晨報』は「災荒特載」と題する華北大飢饉の特集記事の欄を特別に設けているが^⑥、各新聞もこれと競うかのように、一月余りにわたって華北大飢饉に関する記事を掲載している。

このように、華北大飢饉は中国の都市部において新聞という新しいメディアが急速に発展しつつある最中に発生したことにより、新聞間の競争における報道合戦の積極的な対象となり、実際の被害規模以上のインパクトと影響力を「輿論」に対して与えることになった。

（2）ナショナリズム

協同組合（合作社）の理論家であった于樹徳という人物は、故郷（直隸省静海県）にも程近い場所で発生した大飢饉の惨状に衝撃を受け、「こうした現象は、20世紀では、われわれ大中華民國特有の現象であり、これは世界のどんな劣等民族・亡国民族でも、われわれがいる場所に追いつくことはできないだろう」と慨嘆している（于樹徳 [1920]1923: 1-2）。華北大飢饉をめぐる新聞の記事や言論の中で多く表現されていたのも、こうした「亡国」の危機意識に基づくナショナリ

ズムであった。危機意識の具体的な内容については、以下のようにまとめることができる。

第1に、外国の迅速で活発な救援活動に対する中国の緩慢な反応や対応である。もともと華北大飢饉を最初に伝えたのは、外国人宣教師と上海の英字新聞によるもので⁷⁾、中国の政府や新聞はそれに完全に遅れをとっていた。例えば『晨報』の記事では、アメリカやイギリスによる国際的な義援活動の動きを伝えた上で、「中国の北部は急いで救済すべきである。そうしなければ、外国の義援金（賑款）が来たときに、それを行うのが紅十字会であろうと、外債であろうと、飢えた人はとくに死んでしまっている。急ぎ四億の同胞は、早く行動を起こしてこれらに追いつき、救済に尽力すべきである」と（「北方四十年未有之旱災」『晨報』中華民國九年九月十二日）、「四億の同胞」に対して外国の救援活動に急迫すべきことが語られている。

第2に、中国が政治的に「統一」できていない現状への自覚である。当時は、北京の他に広州にも孫文らによる「中華民国」を名乗る軍政権が存在していたが、北京政府内部では1920年7月に大飢饉の被災地を舞台とした戦争（直皖戦争）が展開され、他方で広東軍政府も分裂し、反孫文派が離反して「南北和議」を目指して北京政府と接触を試みていた。こうした混迷極まる政局騒動に対して、先に取り上げた楊鐘健は、「何が『国民大会』なのか、何が『南北和議』なのだろうか。単に大会が開かれず、和議が成立しないことを心配しても、それで中国人の大半が餓死することはない」と（前掲「今年暑假回家的所得（三）」）、激しい憤りを表明している⁸⁾。「南北統一」の問題に関わる言論については、後に再び取り上げることにする。

最後に、政府の無能力や腐敗である。先にも触れたように、政府の無策や地方官の横暴を非難する記事は数多いが、ここでは保守系の総合誌である『東方雜誌』に掲載された、楊瑞六という人物の文章を以下に引用する。この文章でも、外国の迅速な対応との比較で、自国政府の無策に対する批判が語られている。

まさにこの巨大な飢饉が発表される以前、政府からは未だいかなる報告も聞かれなかった。北方の各省は、もともと督軍・省長を持ち、北京も各部機関を持っているが、彼らは毎日自分たちのために平民の膏血を搾り取っている。この種の近くで起こった災難について、彼らは見て見ぬふりをしていた。だから外国の宣教師の外国語新聞におけ

る通信を待つて、はじめて都督が急いで省に引き返したのである。それでは彼らが司っているのは何事であるのか。どうしてわが民は全く無関心でいる長官を、日々納税して家畜のように養っているのだろうか。（楊瑞六 1920: 14）。

政府の無能力という問題に関連して、『大公報』に掲載されたある評論では、「わが国人には一種の慣性があり、為すべきことがある場合、多くは政界の名士のおよび地方の声望ある士紳に依存してしまう。一つの国で政界の名士および地方の声望ある者は、極めて少数である。今年の災害地域の広さや災害状況の深刻さは、少数の人に依存したところで一体何の役に立つというのか」と（去非「救災問題」『大公報』中華民國九年十月二十二日）、伝統的に中国では必要な事業が政府ではなく「少数の人」に委ねられていることが、今回の大飢饉の根本原因であると論じられている。続けてこの評論は、義援金を出すことは「およそ国民であれば反対する理由はない」にも関わらず、なおも反対する者がいることを指摘した上で、その理由は必ずしも良心がないがためではなく、「政府がその信用を失っている」からに他ならないと述べている（去非「救災問題（続）」『大公報』中華民國九年十月二十三日）。

（3）災害ユートピア

災害という事象は、以上のようにそれまで潜在的に抱えていた矛盾や困難を顕わにするというだけではない。とりわけ、無差別的にあらゆる人々に襲い掛かる非日常的な体験が、逆説的に「災害ユートピア」と呼び得るような、ある種の利他的な連帯感や幸福感を生み出すことも、広く知られている事実である（北原[1983]2013; Solnit 2009=2010）。例えば、1923年の関東大震災においては、「貴きも賤しきも、富たるも貧しきも、位あるも位なきも、皆一様平等に玄米の握飯にまで生活の規準を引き下げられた」「一町一画の住民が激動に疲れきった身体を徹夜して、互いに相警め、互いに相扶け合ったあの真剣な精神」（権田保之助）という、階級的秩序の解体による平等と相互扶助的な行動（その裏面として朝鮮人虐殺のような排外主義）の出現が観察されている（筒井 2011: 103-10）。

華北大飢饉においても、北京、上海、天津などの都市で中国の有力者とアメリカを中心とする外国の宣教師や実業家が合同で組織した華洋義賑会など、次々と数多くの慈善団体が設立されるとともに（Junk 2014）、

被災者支援のための様々なチャリティ・イベントが開催されている。京劇俳優の梅蘭芳が北京の新明大戲院で9月22日から2日間のチャリティ公演を開催したほか、10月にかけて各学校や慈善団体が被災地調査の報告や講演、古物展覧会、野外映画上映、花火打ち上げなどを举行している（陳凌 2006: 137）。

こうした義援活動の活性化の動きを踏まえ、『申報』のある評論は「中国の不統一」の原因として「武人」「官吏」「政客」の存在を挙げた上で、「南北のどの場所でも災害に遭遇したとしても、全て寄付と救済が行われ、境界の分け隔てがなく、次第に他人の事にまで広がっていく。人民の団結力は既に固く、いわゆる不統一の権力は独りで勝手に自壊しようとしている」という、「統一」への期待を表現している（冷「救災与統一」『申報』中華民國九年九月二十二日）。また『民国日報』の評論でも同様に、「北方人が餓死しようとして、南方人が彼らを義賑で救おうとしているのに、まだ南北統一とは言えないのだろうか」と述べられている（佐治「北方人還不該死麼！」『民国日報』中華民國九年九月二十八日）。このように、政局に基づく合意や妥協ではなく、今回の華北大飢饉における義援活動の盛り上がりを通じて生まれる連帯感こそが、真の「南北統一」の契機になり得るという論理がしばしば語られていた。

12月16日に甘肃省海原県を震源とした大地震が発生し、推定犠牲者20万人という被害をもたらすと、翌年の2月以降に、この震災と華北大飢饉とを併せて、華洋義賑会の主導の下で義援金を募るための大規模な「賑款大会」が各都市で次々と開催され、パレードが举行されている。上海で実施された「賑款大会」を報道した記事によると、騎馬が先導して自動車や軍楽隊、花車などが続き、車の上には仮装した人が乗っていた。仮装の中身は、「一方が富者の様子の扮し、もう一方が被災者の状況に扮して、貧富が極めて等しからざること非常にわかりやすく表現」するもので、その趣旨は「大部分が富者が惜しみなく救災にお金を出すよう勧めるものであった」という（「急募賑款大会游行紀」『申報』中華民國十年三月十四日）。『晨報』は全国各地の「賑款大会」で総額約230万元が集まったことを報告し、以下のようにその成果を称えている。

今回の全国急募賑款大会は、各界の人士が積極的に協力し、実に中国の慈善事業の新しい世紀を開くものである。最も注目すべき点は、（一）平民のための慈善運動で、各地の郷紳、商人、学者な

ど各界で、この盛挙に参加していない者はないこと。（二）現在の中国政治が混乱している時に、南北問題は容易に解決できず、また各省も自分勝手に振舞っており、あらゆる事業がすべて実行できなかったが、今回は全国が一致した行動を行うことができていること。（三）今回の各国の中国に來ている人士で、熱心に協力しない者はなく、これもまた国際的な互助の先駆けとなっていること。今回の大挙動の成就是、もとより災民がその恩恵を受けるだけではない。（「全国急募賑款大会之募款総額数」『晨報』中華民國十年三月二十三日）

言うまでもなく、こうした義援活動の盛り上がりは、あくまで大都市部における一過性のものに過ぎなかった。しかし、束の間とはいえ「全国一致の行動」を実現し得たことは、国際社会における中国の後進的な地位、終りの見えない政治的な混乱、政府の無能力や腐敗といった、華北大飢饉が頭悩にした様々な困難を解決する契機になり得るという期待を、人々に抱かせることにもなった。

ここで描き出した「ナショナリズム」や「災害ユートピア」は、先に示した通り、異なる階層や集団の間を連帯・統合させるものであるが、そのことは階層や集団ごとの災害体験が質的に同じものであったことを意味するものでは決してない。そこで次に、その動向が新聞記事などで比較的详细にうかがうことのできる、学生という特定の層に焦点を当てて、学生のアイデンティティとその変容という視点から華北大飢饉における災害体験の意味を検討していくことにしたい。

4. 学生のアイデンティティと災害体験

（1）五四運動から災害被災地へ

1920年華北大飢饉における最も特色のある事象のひとつが、当時はまだ萌芽的な新しい都市の知識階層である「学生」が被災地に直接赴いて、大規模かつ組織的に調査や救援の活動を行ったことである。

『晨報』の紙面に掲載された告知によると、華北大飢饉の後に結成された慈善組織の一つである北五省旱災救済会が、北京の学生団体である北京学生聯合会に被災地の調査を要請し、それに対して北京学生聯合会は「社会に奉仕（服務）する必要」があることを認めてこれに応じたという（「北京学生聯合会特別啓事」『晨

報』中華民国九年九月十四日)⁹⁾。調査団は記事と写真撮影の担当がそれぞれ1人、衛生隊である医学生が2人の4人で一つの調査班をつくり、全部で10班が組織された。調査記事は主に北京の『晨報』に掲載され、しばしば他紙にも転載されているが、ここでは『晨報』の記事を中心に扱っていくことにする¹⁰⁾。

被災地調査を請け負った北京学生聯合会は、1919年5月4日の天安門前での学生によるデモ（および暴動）を母体として結成された、北京の「五四運動」を主導した学生団体である。五四運動自体は、「愛国」を掲げて日本の占有する山東半島の主権回復を目指す群衆デモであるという以外は、きわめて多面的な要素を持つ歴史事件である¹¹⁾。しかし、少なくとも都市の学生層に限定して言えば、五四運動はラディカルな伝統文化批判を通じた「社会」の根本的変革という1910年代の新文化運動を、都市におけるデモや街頭での講演活動などを通じ、非知識層である都市の民衆（「平民」）と一体となって実践した、という意義を持つものであった¹²⁾。当時の学生は都市において依然として少数の新興階層であり、また結果的に「売国官僚」の罷免とパリ講和条約の調印拒否という「成果」を勝ち取ったこともあって、学生たちは「社会」を先導する少数者としての自負心や使命感を強く抱くようになっていた。先にも取り上げた羅家倫（前年5月4日の天安門前のデモを主導した学生リーダーの一人で、「五四運動」という言葉を創り出した人物でもある）は、五四運動以降の学生界を批評して、あらゆる物事に何でも口出ししたがる「学生万能」の観念が蔓延していることを指摘している（羅家倫 1920: 851）。

こうした五四運動直後における学生の高揚感、華北大飢饉においてもそのまま引き継がれている。例えば、北京学生聯合会の副主席であった汪德耀は¹³⁾、被災者救援の活動が盛り上がりつつある中で、「われわれ学生界がこの件について何の動きも聞かない」という現状に不満を表明し、「われわれ全国の学生に希望する。『五四』『六三』の精神を用いて¹⁴⁾、「社会」服務の事業を行い、あの二千万の死の淵にある同胞を救済せよ！」と訴えている（汪德耀「災区的救济与学生」『晨報』中華民国九年九月十九日）。彼によれば、学生がこの災害において担うべき役割は、文字を通じた被災地の宣伝・報告を通じて「社会の同情心を引き起こすこと」にあり、もし学生が組織による一致した行動を実行できれば「その結果は、『五四』『六三』運動に劣るものではない」という（同前）。

(2) 被災民と学生

このように、華北大飢饉であらためて刺激された、五四運動以来の学生たちの自負心や使命感はしかし、実際の被災地調査の経験を通じて深刻な挫折や困難に直面することになる。例えば、彰徳（現河南省安陽市）への調査を担当した王鑑武という学生は被災地調査への出発に先立って、「われわれ北京の学生は、日ごろ全国の文化運動の中心的なリーダーであることを自負している。現在それが試される機会が訪れた。われわれが結局のところ本物なのか偽者なのか、そして中身がないのか現実的なのか、それが試されようとしているのだ」と、「学生」としての使命感を力強く語っている（「忠告旱災調査員」『晨報』中華民国九年九月十二日）。しかし、実際に被災地へ赴いて被災民のあまりの悲惨な姿に直面した彼は、「つらくて私は三日熟睡できず、心の中はいつも彼らのために苦しめられた」という衝撃を受け、その時の取り乱した様子を以下のように率直に記している。

このような有様だったので、決して下車して彼らと話しをしたり、まともに彼らを正視したりしないようにした。彼らが車の周りを囲むと、私は急いで目を閉じたが、それでも彼らが私の目の前で苦境を訴える様子が目に見るようだった。「道をあけないか！この方が来られたのは災害の調査であって、救済ではない！」という、私たちを護送する軍隊の叱咤の声が聞こえるだけだった。この声を聞きながら車はガタゴトと通り過ぎたのだが、心の中では、飢民たちが後を追って私を罵り恨んでいる情景が目に見えようだった。

およそわれわれが通過した村では、災害の調査に来たと聞きつけただけで、どの村の村長も外まで出迎えて額ずいて苦境を訴えないものはなかった。彼らは「生き仏さま、あわれな民をお救い下さい」と言うのでなければ、「欽差大臣、多くの恩典を施して下さい」と言うのだが、私たちは全くどうすることも出来なかった。実に滑稽で哀れである。私たちはどうしようもなくなり、彼らにいくつかの言葉で諭すことしかできなかった。

（王鑑武「磁県到臨漳県沿途の惨景」『晨報』中華民国九年十月八日）¹⁵⁾

羅家倫も先に取り上げた記事の中で、同様の体験を記している。彼は、乗っている列車の窓から父親が死

んで泣いている母子を目撃し、堪らなくなつて列車を降り慰めの声をかけようと思ったものの、母親が野菜を切るための刀を手にしていてのを見て怯んでしまい、「私は心が苦しくて、これは実に語ることも困難な話である」と、自らの無力を正直に告白している（前掲「京漢道上災情目撃期」）。このように、五四運動の経験を通じて強い使命感和自負心を抱いていた都市の学生たちは、（皮肉にも彼らの批判対象でもあった地方軍閥の）軍隊に護られて被災地の調査を行いながら、被災民をまともに直視することすら困難という現実に対して、深刻な無力感に苛まれることになった。

（3）「五四運動」への自己批判

被災地と被災民の惨状に対して学生たちが全く為すすべもないという現実、そもそも「五四運動」の経験それ自体に欺瞞があったのではないか、という彼らの自己批判にも表れている。例えば、北京高等師範中学の学生であった李亮恭は、以下のように語っている。

去年の「五四運動」以来、われわれは常に愛国を想い、国を愛すべきであると語り、また人類を愛すべきであることを理解している人もいる。しかしこれらの「愛」は、口先ばかり、頭で考えたものばかりで、何の役にも立たない。ちゃんと現実に行なうしなければならない。われわれは山東問題という非常に重大な問題のために、誰もが力を尽くして闘った。しかし、今回の華北五省の災害はきわめて大きな問題であり、まさに中国が死の運命へと至るのに十分である。皆はどうして、このことをまだ自覚せずに、全力で救済の方法を考えず、常々語っている「愛」を実行しないのか。（李亮恭「這次華北五省災荒底影響和学生底責任（続）」『晨報』中華民國九年十一月四日）

彼はこう述べた上で、「現在、新文化運動に従事している人は非常に多い。しかし、一日日が暮れるまで『デモクラシー』を唱えたところで、それは中身の無い話（空話）である」と切り捨て、むしろ科学の研究を通じた物質や事実にもとづく「社会改造」こそが学生の責任であると論じている（同前）。このような、「学生が常日頃言っている愛国や愛同胞は、まだ中身の無い話であることを自覚すべきである」（『論民国政府的放棄責任』『晨報』中華民國九年十月一日）という学生自身による自己批判は、華北大飢饉をめぐる論評の中で

しばしば語られたものであった。ここで学生たちが「中身がない」という自己批判を執拗に繰り返しているのは、四書五経に代表されるそれまでの「虚飾的」（陳独秀）な伝統文化とは異なり、彼ら自身が五四運動の経験を通じて、都市の民衆＝「平民」に根差した、真に中身のある「愛国」や「社会」の意識を獲得したと自負していたからに他ならない。

華北大飢饉が起こった時期は、ちょうどイギリスの哲学者であるバートランド・ラッセルが中国を訪問し、西洋文明批判を講演している時期と重なっていた。さらに新文化運動を主導した陳独秀が急速に政治的志向を強めてマルクス主義に傾倒するようになり、胡適と李大釗の間に有名な「問題と主義」をめぐる論争と対立が起っていた。以上のような、近代西洋文明への憧憬と楽観的なリベラリズムに彩られた新文化運動に対する確信を動揺させる事態も、学生たちのある種の過剰な自己批判の背景に存在していたと考えられる。

全体的に見れば、依頼されて被災地調査を担ったことを除けば、学生層は五四運動の時のようには、華北大飢饉の救援活動や啓蒙活動に対して能動的な役割を發揮することはできなかった。そのように、学生は災害体験における挫折や困難を通じて、自らの社会的な役割はその先端的な知識や価値意識を通じた啓蒙ではなく、「社会」の諸問題を具体的に解決できる能力にこそ置かれるべきという（それ自体は新文化運動の中にも潜在していた）観念を強めていくことになった。五四運動を契機に活性化した中国の学生運動は、1920年代を通じ、共産党や国民党などの政治勢力の動員と組織化によって徐々に自律性を失っていくが（呂芳上1994）、その自律性は華北大飢饉における災害体験の中で既に動揺を見せはじめていた。

おわりに

毎年のように災害・飢饉に見舞われた中国の近代において、1920年華北大飢饉は同時代の人々によって、活発に様々な意味や解釈が語られたという点できわめて特異な災害体験であった。一方では、南北分裂や政府の無能・腐敗などに対する危機意識に基づくナショナリズムが、他方ではチャリティ・イベントなどの義援活動の空前の活性化を通じて、それらの危機と困難を解決するための契機となり得るという期待（「災害ユートピア」）が生み出された。その中で新興の知識階層としての学生は、被災地調査などの災害体験の中で自

らの無力さを痛感することで、前年の五四運動の経験に対して「中身がない」という自己批判を展開するようになっていく。

以上のような、華北大飢饉をめぐる活発な語りや言論をもたらしたのは、本稿で示してきた通り、「中華民国」という国民国家の政治的な枠組みが成立して間もない時期であったことに加えて、二つの社会的な条件を指摘することができる。つまり、1 つには、比較的自由な言論空間の下で新聞という新しい大衆的なメディアが急速に成長・拡大しつつある時代であったことである。そしてもう1 つは、学生層が前年の五四運動における成功体験を通じて自負心と使命感を高揚させていた時期と重なったことで、彼らの学生としてのアイデンティティを刺激し、かつ深刻な動揺をもたらしたことがある。

最後に指摘しておかなければならないのは、先に取り上げた于樹徳の嘆きに象徴されるように、この災害体験の中で露呈した様々な深刻な諸問題が、多く中国の社会的・文化的な特性つまりチャイニーゼネスの問題として語られていたことである。例えば、「中国人がこれまで自治能力がないために衛生観念が非常に薄弱であることは、隠れもないことである」(「灾区衛生調査後の我見」『晨報』中華民国九年十月十日)、「われわれ中国人は組織の能力が、実際のところ零度以下一万度にまで下がっている」(宗錫鈞「現時災民生活的情形与婦女救济問題」『晨報』中華民国九年十月二十日)など、しばしば華北大飢饉は「中国人」の根本的な病理を映し出すものとして理解されていた。これは、一面では新文化運動の伝統文化批判と連続しているものであるが、他方で異なるのは、それが正統文化をめぐるヘゲモニー闘争としてではなく、目の前の飢餓や貧困を具体的に解決するための実践的な批判が目指されていたことにある。以降、救貧や社会政策を志向する為政者や知識人にとって、チャイニーゼネスが何かを理解していくことは、一つの重要な課題となっていく⁽¹⁶⁾。

本稿では紙幅や能力の限界もあり、本来詳細に検討すべき、華北大飢饉の救援活動を主導した華洋義賑会については、ほとんど触れることができなかった。華洋義賑会における災害体験の意味と、その経験の中から生まれた、農村における「合作社」の思想と運動については、稿を改めて論じることとする。

注

(1) ここで挙げた推定犠牲者数は Li (2007: 284) を参照し

た。大躍進期については、最も標準と思われる中国近現代史の概説書の記述に従った(浅野・川井編 2012: 121)。

(2) これは特に、日本における「戦争体験」をめぐる歴史社会学的な研究の分厚さと比較すれば(もちろん体験の質や事象の規模の違いを考慮するとしても) 明らかである。本稿と問題意識が近いものとしては、江戸安政大地震後に流行した鯰絵に表現されている人々の期待や願望を分析した北原 ([1983]2013) や、関東大震災後の大衆社会化における社会意識の変容を扱った筒井 (2011) などを挙げることができる。

(3) 以下の華北大飢饉の記述については、この災害を全面的に扱った研究である陳凌 (2006) に拠るところが大きい。その他、華洋義賑会 (北京国際統一救災総会) の活動報告書である黄鳳華編 (1922) および Peking United International Famine Relief Committee (1922)、そして 1990 年代に組織された近代中国防災研究課題組の研究成果である、李文海他 (1993: 1-23, 1994: 135-144) を参考にした。

(4) 鄭俠の『流民図』とは、11 世紀の北宋の時代の詩人鄭俠 (1041-1119) が 1074 年に、前年に目撃した河北、河東、陝西の大飢饉を描いて神宗皇帝に献上したものである。鄭俠が『流民図』を描いた目的の一つは、王安石の新政が失政であることを訴えることにあった (高橋 2006: 138-40)。

(5) これが当時において、災害対応として迅速であるのか、緩慢であるのかの評価は、必ずしも簡単なものではない。例えば、日中戦争の最中に起こった 1942 年の河南大飢饉においては、被災地の救援よりも戦争のための資源徴集が優先され、翌年の 3 月まで蒋介石は大飢饉そのものを認知しようとはせずに放置していた (石島 2014: 21-31)。

(6) 『晨報』の「災荒特載」は、10 月半ば以降に記事を徐々に減らしたり中断したりしながら、11 月 5 日まで続いている。

(7) 華北大飢饉に関する初期の報道では、しばしば上海の英字新聞である *North China Daily News* (中文では『字林西報』) の記事が転載・紹介されている。

(8) ここで言及されている「国民大会」とは、直隷戦争に勝利した直隷派の呉佩孚が提案したもので、商・工・農・教育の各界の代表が一同に会し、憲法制定などの国家的課題について話し合うという、一種のコーポラティズムに基づく直接民主制のことを指す。「国民大会」の構想は一時的に盛り上がりを見せたものの、呉佩孚が上官の曹錕や奉天派の張作霖の反対に簡単に折れてしまったため、9 月上旬には運動は自然消滅している (味岡 1986: 365-70)。

(9) 北五省旱災救济会 (名称は記事や文献によって一定しない) は汪大燮や熊希齡など北京政府の有力者が設立した慈善団体であり、10 月のはじめに北京国際統一救災総会に統合されている (陳凌 2006: 113-4)。学生団体に調査を依頼する方針は、会が結成された 9 月 11 日において既に決定されているが (「北五省灾区救济会之成立」『晨報』中華民国九年九月十二日)、職業的な新聞記者や研究者ではなく、わざわざ学生団体に依頼した経緯や理由については明確には記されていない。

(10) 『晨報』と「五四運動」の関係は深く、1916 年 8 月に『晨報』として発刊された際には、李大釗が編集主任を務めている。編集長であった陳溥賢 (淵泉) は文化欄である「副刊」で李大釗とともに精力的にマルクス主義の翻訳・

紹介を行い、五四運動を積極的に支持する報道を展開していた（石川 2001: 31-2）。1920年8月1日には胡適や李大釗、陶孟和、高一涵など新文化運動を牽引した知識人7名で、表現と集会結社の自由を求める「自由を争う宣言」が発表されている（胡適他「争自由の宣言」『晨报』中華民國九年八月一日）。

(11) 五四運動に関する近年の研究動向は、吉澤（2012）を参照。かつて筆者は五四運動の性格規定について、「反帝国主義」あるいは「反日」「民族主義」という価値や目的から理解するのではなく、むしろ社会学的な観点から国家形成の一貫としての都市のインフラストラクチャー建設の役割に着目したことがある（穂山 2009）。

(12) 五四運動における学生の活動や意識については、齋藤（1986）が非常に詳しい。

(13) 学生の経歴については、徐友春主編（1991）および中国人名大詞典編集委員会編（1992）を参考にした。

(14) 「六三」とは1919年6月3日に北京で学生デモと警察との衝突が発生し、以降の数日間にわたって群衆運動の高揚がピークに達し、結果として北京政府による「売国官僚」の罷免の決定をもたらしたという一連の出来事を象徴的に指し示す日付である（齋藤 1986: 197-8）。

(15) 王鑑武は同様に、以下のような体験も記している。「一人の5, 60歳の老婆が私に訴えて言うには、子供が自分を置いてけぼりにして逃げてしまったそうで、他に親類もおらず、私に代わりに子供を探し出してきてくれという。……そう言う、跪いてゴンゴンと頭を打ちつけた。わたしはこの時、すぐにいくつかの慰めの言葉をかけたが、振り返って見ると、後ろに生菜を座って食べている者がいるではないか！私は足の向きを変えて走り出した。私は実のところ心臓が強くなく、二度と災民の状況を見ようとはしなかった。心の中は、考えるほど耐えられなくなり、つらくなるほど心は焦り、さらに憂鬱になるという道理で、口を開けば人を汚く罵るようになってしまった」（「早災調査員五組報告之二」『晨报』中華民國九年九月三〇日）。

(16) 1930年代の社会政策論の中で、中国社会の構造的特性に対する問題関心が重要な役割を果たしていたことについては、穂山（2015a, 2015b）で論じた。

参考文献

〔日本語文献〕

- 味岡徹, 1986, 「南北対立と連省自治運動」中央大学人文科学研究所編『五・四運動史像の再検討』中央大学出版部, 339-87.
- 穂山新, 2009, 「近代中国の群衆と公共性——中華民国初期の首都建設事業と「人民」のナショナリズム」佐藤成基編『ナショナリズムとトランスナショナリズム——変容する公共圏』法政大学出版局, 143-61.
- , 2015a, 「近代中国の社会政策思想——柯象峰の社会救済論」『社会学ジャーナル』40: 113-30.
- , 2015b, 「慈善と社会連帯のあいだ——日本と中国における社会的権利の形成をめぐる」『社会学評論』261: 2-18.
- 浅野亮・川井悟編, 2012, 『概説近現代中国史』ミネルヴァ書房.
- 石島紀之, 2014, 『中国民衆にとっての日中戦争——飢え、

社会改革、ナショナリズム』研文出版.

石川禎浩, 2001, 『中国共産党成立史』岩波書店.

北原糸子, [1983]2013, 『地震の社会史——安政大地震と民衆』吉川弘文館.

小関信行, 1985, 『五四時期のジャーナリズム』同朋社.

齋藤道彦, 1986, 「五・四」北京学生運動断面」中央大学人文科学研究所編『五・四運動史像の再検討』中央大学出版部, 153-215.

高橋孝助, 2006, 『飢饉と救済の社会史』青木書店.

筒井清忠, 2011, 『帝都復興の時代——関東大震災以降』中央公論新社.

吉澤誠一郎, 2006, 「五四運動から読み解く現代中国——ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手がかりに——」『思想』1061: 147-59.

〔欧文学文献〕

- Janku, Andrea, 2014, “The Internationalization of Disaster Relief in Early Twentieth-Century China”, Mechthild Leutner, Izabella Gokhman ed., *State, Society and Governance in Republican China*, LIT Verlag, 6-28.
- Li, Lillian M., 2007, *Fighting Famine in North China: state, market and environmental decline, 1690s-1990s*, Stanford: Stanford University Press.
- Mallory, Walter H., 1928, *China: Land of Famine*, second printing, New York: American Geographical Society.
- Mann, Michael, 2012, *The Sources of Social Power; volume. 3: Global Empires and Revolution, 1890-1945*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Marshall, Thomas Hunphery, and Tom Bottomore, 1992, *Citizenship and Social Class*, London: Pluto Press. (= 1993, 岩崎信彦・中村健吾訳『シティズンシップと社会的階級』法律文化社.)
- Peking United International Famine Relief Committee, 1922, *The North China Famine of 1920-1921, with special reference to the West Chihli Area: Being the Report of the Peking United International Famine Relief Committee*, Peking: Commercial Press Works.
- Solnit, Rebecca, 2009, *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster*, Viking. (= 2010, 高月園子訳『災害ユートピア——なぜその時特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房.)

〔中国語文献〕

- 陳凌, 2006, 《1920年華北五省旱災与賑務研究》, 山東師範大学碩士學位論文.
- 池子華・李紅英・劉玉梅, 2011, 《近代河北災荒研究》, 合肥工業大学出版社.
- 鄧雲特, [1958]2011, 《中国救荒史（重印本）》, 商務印書館.
- 戈公振, 1927, 《中国報学史》, 商務印書館.
- 黃鳳華編, 1922, 《北京國際統一救災總會報告書》, 北京國際統一救災總會.
- 李文海他, 1993, 《近代中国災荒紀年統編》, 湖南教育出版社.
- , 1994, 《中国近代十大災荒》, 上海人民出版社.
- 羅家倫, 1920, 〈一年来我們学生運動底成功失敗和将来応取の方針〉, 《新潮》, 2(4): 846-61.
- 呂芳上, 1994, 《從学生運動到運動学生——民国八年至十八

年》，中央研究院近代史研究所。

徐友春主編，1991，《民国人物大辞典》，河北人民出版社。

楊瑞六 1920 <饑饉之根本救濟法>，《東方雜誌》，17(19): 9-15.

楊琪，2009，《民国時期減災研究（1912—1937）》，齊魯書社。

于樹德，[1920]1923，<農荒預防與產業協濟會>，《農荒預防策》，商務印書館，1-45.

中國人名大詞典編集委員會編 1992，《中國人名大詞典》，上海辭書出版社。

朱濤，2008，<“丁戊奇荒”對江南的衝擊及地方社會之反應——兼論光緒二年江南士紳蘇北賑濟行動的性質>，《社會科學研究》，1: 129-39.

(AKIYAMA, Arata / 筑波大學人文社會系特任研究員)